

# 革新性のフィンテック、信頼性の銀行

研究員 高山航希

## 1 フィンテック=ICTによる金融サービス

「フィンテック」(FinTech)とはFinancial Technologyの略であり、情報通信技術(ICT)を利用した新しい金融サービスや、その業界を指す言葉である。フィンテックは、銀行などの従来の金融機関とは対照的な考え方で金融サービスを設計、提供している。なかには、従来の金融より優れているとして、多くの支持を集めるフィンテックも現れており、将来、従来の金融機関や金融サービスに取って代わる可能性を指摘する向きもある。

## 2 フィンテックは様々な分野に存在する

元々金融業は情報集約型の産業であり、金融機関はシステムの洗練に努めてきた。個人向けにはATMやインターネットバンキング等の整備を行ってきたが、金融機関は規制が厳しいこともあり、その内容は、窓口や渉外で行う取引を非対面チャネルでもできるようにすることが主であった。一方、フィンテックは規制が追い付いていないこともあり、ICTを利用することで初めて実現可能なサービスを様々な分野で生み出している。その革新性は、技術そのものというより、ICTを金融サービスに応用するアイデアにある。

例えば、決済では、スマートフォンやタブレットに小型のカード読取装置を取り付けることでクレジットカード決済に対応できる事業者向けのシステム「スマートフォン決済」が注目されている。日本ではCoiney、楽天ス

マートペイ、Squareといったサービスがある。いずれも料金は3%前後の決済手数料のみで、導入費用や月額費用がかからない(読取装置もおおむね無料)。売上の入金も最短で翌日と早いことから、従来のクレジットカード決済に比べ敷居が低く、小規模事業者や個人事業者の利用が見込まれている。

融資と運用の分野では、ウェブサイト上で資金を借りたい人と運用したい人を結び付ける「ソーシャルレンディング」あるいは「P2P金融」等と呼ばれるサービスがある。銀行が介在しないため貸付金利はより低く、運用利回りはより高くできる。小口化されているため、投資家はリスク分散が可能である。日本ではmaneo、AQUSH、SBIソーシャルレンディングといった事業者がある。米国のLending Clubは株式上場を果たした。

## 3 フィンテックではICT企業が注目される

フィンテックで活発なのは銀行や証券会社といった従来の金融機関ではなく、ICT業界の企業である。ICT企業にとって、金融分野はフロンティアである。そこには様々な企業が参入しているが、特に注目されているのは「スタートアップ」と呼ばれる種類の企業である。スタートアップは極めて小規模ながら、革新的なビジネスモデルで急成長を狙うものである。ICT関連のビジネスは元手をさほど必要としなかったり、コストをあまりかけずに多くの顧客にアプローチできたりするケー

スがあるため、そのような戦略が可能になる。

フィンテックの特徴は、利便性と開発のスピードを重視する点である。しばしばベータ版(未完成のテスト版)段階でリリースし、利用者からのフィードバックを元に、走りながら機能追加・修正を行っていく。このようなやり方により、アイデアをすぐ形にでき、競合相手の先を行きながら顧客の利便性を高めていくことができる。フィンテックが多くの利用者を引き付けているとすれば、こうした点も要因だろう。ただし、これらはフィンテックの特徴というより、インターネット業界の特徴と言った方が適切かもしれない。

これに対し、従来の金融機関は堅確性を重視する。システムは検討を重ねて慎重に開発されるため、更新にも年単位の時間がかかる。システム全体の完成度、信頼性は高いが、革新的なサービスは生まれにくい土壌である。

#### 4 フィンテックは従来のインフラを利用

フィンテックは単機能であることがほとんどである。つまり、一つのサービスは一つの機能しか提供しない。したがって、フィンテックが利用者の支持を集め、広く浸透していくことは、大手銀行を中心に追求されてきた金融のワンストップ化が逆回転し、解体されていくことを意味する。このような現象は「アンバンドリング」と呼ばれている。アンバンドリングにより、個人顧客が金融取引を行う際のインターフェースはフィンテックに置き換わってしまう可能性がある。

一方で、当然のことながら、フィンテックは単独でサービスを提供することはできず、背後では必ず従来の金融機関による金融インフラを使っている。このことで、フィンテッ

ク自体は堅確性をさほど重視していないにもかかわらず、必要な信頼性を確保できていると言える。したがって、アンバンドリングが進んだ場合、従来の金融機関は高いコストを負担して信頼性の高い金融インフラを維持する「裏方」に回り、フィンテックはそれをうまく利用して個人向けサービスを提供する、という構図も全くありえないとは言えない。

#### 5 従来型金融機関はどうすべきか

検索のGoogleやポータルサイトのYahoo!等を見ても分かる通り、インターネット上のサービスはWTA(Winner takes all、勝者総取り)となりやすいと言われており、一強多弱の構図がしばしば見られる。金融でも、一度フィンテックに主導権を奪われた分野では、巻き返すことが困難になる恐れがある。

危機感を抱いた従来型の金融機関は、自らの内にフィンテックを取り込む戦略に出ている。海外の銀行では、フィンテック企業の買収や、自社内へのフィンテック開発部門の設置、ICTエンジニアの積極的な採用などを行っている。日本では三菱東京UFJ銀行やふくおかFGがフィンテックのアイデアコンテストを開催している例がある。優れたアイデアは事業化も視野に入れているようである。

フィンテックが本当に従来の金融機関に置き換わってしまうのか、正確に見通すことは難しい。ただ、いずれにせよフィンテック的なものが今後個人リテール金融に浸透していく可能性は高いと思われる。従来の金融機関は、最大の資産とも言える信頼性を保ちつつ、革新を生み出す環境を自らの内に整える方策を考えていくことが必要ではないだろうか。

(たかやま こうき)